

水晶体

紫 圭子

むきだしの

眼球

麻酔が打たれた

痛みはわずかだった

眼球は見る

濁りはじめた

水晶体が剥がされていくのを

覆いかぶさるように覗く眼科医がふいに消えて
ライトが熱い

光いつしよに

眼球は色彩の海にひきずりこまれていく

不思議な音がひびいた

音楽のようだ

上から濃いピンクの塊が迫ってきて

右から黄の光が射してくる

濃いピンクの塊が消えると

青 緑 赤 光が現れて

つぎつぎに光の色が乱舞する

これはいったいなんだろう

色彩がつぎつぎに現れては消えて

また新しい色と形が迫ってくる
内なる

はなびらの出現だ

と思いきや

画面が暗転

ベージュをバックに黒い小さな三角が横にふたつ並んで三角目が現れた。その下にすこし大きな三角形がひとつ現れて口になった。顔の形だ。三角目玉と三角の口は鬼の顔だった。これはわたしの水晶体が剥がされていくのをわたしが見ているのだ。きつと。この鬼は水晶体の剥がされたあとに付けられる人工水晶体を待っているのだ。急にわたしの手の平に汗が滲みだした。さっき見た鮮やかな色彩は。はなびらの化身にちがいない。わたしの水晶体を葬るために現れたのだ。色とりどりの光るはなびら。幾重にも重なってわたしの水晶体を見送りにきたのだろう。千の蓮のはなびら。はなびらをいちまいいちまい剥がして。あたらしいわたしの人工水晶体にいのちを吹き込む。千の蓮のはなびら。わたしの内なる千のはなびらは目から開かれていくだろう。

音楽は消えて

右目は眼帯で覆われた

握りしめた手の平に

はなびら型の汗がにじんで